
孤独症候群

くりゆー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独症候群

【Nコード】

N2675Z

【作者名】

くりゆー

【あらすじ】

『普通』なようで、『普通』に『普通』じゃないとある高校2年生 山田太郎は、周りから『普通』だと言われることにコンプレックスを抱いていたが。

ある日、小学生の癖に引きこもりの妹と弟を学校に行かせようとして……。

『普通』じゃない妹と

『普通』じゃない弟によって

『普通』なように『普通』に『普通』じゃない山田太郎は

『普通じゃない』事件に巻き込まれてゆく。

1章・普通症候群1（前書き）

初めて、小説というものを書きます。くりゅーです。

元々小説を余り読まない…というか全く読まないのですが、小説家である伯父に感銘を受けて書きはじめました。

文章も稚拙な部分が多く見られるでしょうが

最後まで誰か一人でも見ていてくれたら嬉しいです。

1章・普通症候群1

僕は今とつても憂鬱だ。

とある高校の2学年教室の一室の一番廊下側の最前列の席。

『自分』って物に嫌気がさしてくると

《並山大学 合格判定D》

とかかれた模試の結果通知を見ながら、そう感じていた。

目指す大学が難しいと言えは難しいのだが、合格判定Dという残酷な判決は、メランコリイになるには十分な材料だろう。

だが、僕にはもう一つ。ショックな知らせがその通知にはかかれていた。

「おゝい！お前、今回もやりやがったか??」

僕の気分などお構いなしに、コイツは喋りかけてくる。

名前は瀧澤太陽。

身長は僕より10センチ弱大きく、俗に言う『細マッチョ』。髪の毛は少し長く、学校の生活指導の基準ストレスだ。そして顔は、恐らく僕よりもイケメンだ。

「お前……ロクな結果じゃなかっただろっに……。よく元気でいら

れるな」

瀧澤は文字通り太陽のような奴で、クラス一のひょうきんものだ。声はデカイし、下ネタはスゴイし、いらないうところで頭が高速回転するバカだ。

また空気が読めないという欠点も兼ね備える彼はまさしく『残念なイケメン』だ。

「ハッ、俺は勉強はできないけどよ。こっちはほうは天才だからよ！ 気にしねえのさ！ 点数なんかよ」と力瘤を見せつけて自慢気に話すが

それは聞き直るようにはしか聞こえない。

だがコイツの運動能力は言う通りすさまじい。

つまり彼は

《特出した才能が一個でもあれば、それでいい》
そう言いたいんだろう。悔しいが確かにそうだ。

しかし僕にはそれがない

「で??? どうなんだよ... グラフのほうは?」

一瞬、コイツの馬鹿さ加減に気をとられた隙に太陽に見られてしまった

「おほほww! ! すごい！ お前すごいよww」

見られてしまったのは

右下の得点推移の折れ線グラフだ。

通常これには三つのグラフがかかっている。

一つ目はここ普原西高校の第2学年全体の平均値の推移。

二つ目は全国の平均値の推移。

三つ目は受験者自身の得点の推移。

僕には三つ目のグラフがかかれていない。

ちがう。

二つ目のグラフと三つ目のグラフがピッタリとドッキングしているのだ。

つまり……

「コイツまた平均値だぞ？すつげえな！！」

つまりそういうことだ。

「うっせえ！！騒ぎ立てんなよっ」

そんな言葉虚しく、周りに人が寄り付いてくる。

休み時間のためたくさんの人にかこまれる羽目になった。

「すごいじゃん！！すごいよ太郎。なかなかないよこんなこと！！」

聞いてしまったでしょうか。

寄ってくる男子どもに紛れ、一人の女子が スーパーヒーローを見
るようなテンションで語った中に、

『太郎』という単語が聞こえてしまっただろうか。

それは僕の名前だ

《名前：山田太郎 ヤマタ タロウ》

と丁寧にもフリガナまで、僕の模試の結果通知にもかいてある。

「体力測定も、身長も、座高も、体重も、学力もみんな全国平均値
なんてすっごいよ！テレビでれるよww」

この女の子

ブロンドのロング髪を携えたこの

小鳥遊 遊 という僕の幼なじみは、僕の心のデリケートな部分に
ズカズカと土足でお邪魔してくれた。

トドメに

「日本一『普通』って言葉が似合う学生だよね！太郎って」
と言い放つ小鳥遊 遊。

「うるせー！太陽だの小鳥遊だの…、お前らには『山田太郎』の気
持ちがわかるかよオオ」

机に突っ伏し、これ以上のメンタルへのダメージを防ぐ態勢に入った

「あはは…弄りすぎた…かな??」

「おいおい…顔上げろって」
小鳥遊も太陽も優しい言葉をかけてくれるが、
もはやそれすらも煩わしい

そんなことをやってる内に5限目のチャイムがなった。

僕が憂鬱な理由。

それは合格判定がDだったこと

それにプラスして

全国平均値とまるかぶりだったこと

つまり

『普通』であることだ。

まあ

今に始まったことではないのだが…

人生最大のコンプレックスであり
人生最大の悩みだった。

悩みなら同レベルの悩みがまだあるなあ……。

そんなことを思いながら、
必死にデリケートなハートを修復し5限目は終わった。

そうだ。今日は5限で終わりだった。

1章・普通症候群2

僕はマンション暮しだ。学校に徒歩で通学できるほど近くにあるマンションだ。

僕はいつもの『普通』の通学路を下校していた。

いや。僕らは…が正しいな。

「ねえねえ！この前貸したラノベ読み終わった？」

ブロンドのロング髪を携えた彼女は
小鳥遊 遊。

身長は僕より5センチほど小さいが、胸は……まあ、その…そこそこあった。

「読み終わらないよ…だって借りたの昨日の夜だぞ？」

彼女と下校するのは付き合ってるからとかじゃない。
彼女も僕の住むマンションに住んでいるのだ。

「そうだったけ？…じゃあ…どこまで読んだ!？」

大きなかわいらしい目をこちらに向けながら、覗き込むような姿勢で見つめてきた。

「まだ読んでないよ。今日、早帰りだし読むよ」

「はやく読んでよ〜」

やたらとくつついてくる彼女は、僕を男として意識してないのだから。

幼なじみが言うのも…アレだが…。

遊は学年でもかなり可愛いほうの女子だ。ブロンドのロングというところもポイントは高い。

しかし、どちらかと言えば女子と話すのが苦手な僕も、彼女とは普通に喋れる。

これは幼なじみ故の慣れと彼女の親しみ易い性格のおかげだろう。

時々、女性として意識してしまうが。

僕にとっては良い友達だ。

「ラノベの推理モノだからって嘗めないでよ！すごい仕掛けがあるって…」

熱弁する遊は、僕が殆ど聞いてないこともわかってない。

「あ！それ知ってる！それ1巻？あれでしょ、あの居酒屋のおっちゃんか犯人だったっていう奴でしょ！！？」

彼女の隣にいた瀧澤はここぞとばかりに、空気を読まずに、会話に入ってきた

「ネタバレしてんじゃ……ないわよッ！！」

遊の綺麗な足から、すさまじい威力の蹴りが繰り出された。

「あべしっ……!!」

太股を抱え悶絶している瀧澤

「お前ホント…残念なイケメンだよな」

マンションにたどり着くと、遊とふたりきりになっていた。

いつものことだ。

小、中、高校といつも繰り返していたことだけあって、何も感じない。

瀧澤とはマンションに着く少し前に別れた。これもまたいつものことだ。

ふたりきりでマンションに入り、エレベーターに乗り、降りる。

僕と遊は8階の住人なので、そこで降りる。

僕は自分の部屋の鍵を開けると、

隣の部屋の住人の遊は先に鍵を開けたらしい

「じゃあ、ご飯になったら呼びに行くから。お母さんとききてね」

「あいよ。いつも、ありがとうな」

適当に返した返事だった。が遊にはそう受けとらなかつたらしい

「べつ…別にいいわよそんなの。そ…そもそも私がつくつたんじゃなくてお母さんがつくつたものだし……ありがとうならお母さんにいって！」

なにか不自然な遊の拳動。

「なに焦ってんだよ…？」

「あつあ…焦ってなんかいいわよ…。ただ。太郎がありがとうなんて珍しいから……」
「遊はどうやら普通にもどつたらしい。」

「…そうだっけ？いつも感謝してるぜ、お前んちにはな。」

小鳥遊家にはかなりお世話になっているのだ。ホントに感謝している。

「じゃあね」

遊が部屋入ったあとも、しばらく僕は廊下にいた。

小さい頃からここで育ってきた僕には、余り意識しなかったが。周りをよく見てみるとこのマンション。『普通』に入居したら、かなりのお金がかかる物件だろうと思った。

寒さも感じられ、ドアを開けて僕も部屋に入ってしまった

そこで

もう一つある人生最大の悩みにぶちあたる。

「ただいま」

返事は無い。

一人暮らしだから返って来るわけない？

いや、僕は一人暮らしではない。

玄関から真つ直ぐ廊下を進んで左をむく。すると二つの部屋のドアがある。

左側、つまり玄関側のドアには

《ユウハの部屋》

という札が垂れ下がっている。サッカーボールが描かれており、男の子の部屋なんだな とすぐにわかるようになってる。

左隣の部屋は

《ゆあのへや》

とかわいらしく、ウサギさんなんかといっしょにかかれた札が垂れ下がっている。

「おーい。生きてるか？」

ふざけ調子で言ってみた。が部屋からは生き物がいる気配がない。

「…………お兄ちゃん…………？…………お帰りなさい…………」

《ゆあのへや》

からはか細い、妖精のような声が聞こえた

しかし

《ユウハの部屋》からは何も聞こえない

よく耳をすますと

カタカタカタカタと機械的な音が聞こえる

この二人は僕の妹と弟だ。二人は二卵性双生児なのだが、性格は…
…うーん。似てなくはないか…。

今日は早帰りで、下手をすれば小学生より早く帰れたんだが。

二人はココにいた。

別に熱があるわけでも、学校がインフルエンザで休校してるわけでもない。
つまり

僕の悩みはそこなのだ。

二人はこのまま行けば二ト確定の『引きこもり』なのだ。

溜め息をつきながら廊下を抜けリビングのコタツの電源をいれ、カーテンをしめる。

8階となると眺めはいい。

といっても、都会というより田舎なこの普原町の夜は真っ暗。

普原町の隣、芝川を挟んで向こうにはでかいビルが建ち並んでいて、ほのかに夜景が綺麗ではあるが。

いつもは帰ってくる夕方、面白いテレビをやっているのだが。

今日はまだ3時にもならない。テレビを回してもなんだかアンテナ
ークな番組ばかりだ。

いつもなら、こんな気は起きないが。

返事の無いユウハの部屋がすごい気になる。

というより

普通の人は普通に学校に行ってこんなメランコリイな気分になつて
も、宿題だなんだ って立派に苦しむのに…

妹と弟は…そういう苦しみをショートカットしてるようで、なんだ
か 悔しかったのだ。

「今日こそは言ってやる。いや言うだけじゃたらない、明日から…
学校に行かせよう。」

2章・双子症候群

太郎は文句を行ってやろうと思いつながらコタツで寝てしまった。

時計を見るまでもなく…周りは真っ暗だ。

眠い目擦りながらケイタイをとりだし、時計を確認した。

「……7時…か…」

ふと、お腹が寂しい感覚がした

「ご飯できてるかな…」

暑くなったコタツの電源を落とし、廊下に目をやると
ちやわんと小皿が2セット ちよこんとおいてある。

「……自分勝手な引きこもりさんだな……。」

そのちやわん達は

昨日のご飯に使われたものだ。

それが出されているってことは

『ごはんよこせ』のサインだ。

「…動かないくせに、食べるのかよ…まったく………」

そんな食生活でも、二人はけして太らない。むしろ痩せている。

遊は食事を取りすぎると

『体重増えたアア』

って落ち込むのに。

熱の冷めたコタツから出て、外界の寒気に体を震わせながら、ちやわんをひろった。

もちろんこの食べ終わって一日放置しておいた食器に、食事はよそらない。

ローテーションで使い回してるのだ。

僕は部屋をでて、隣の遊の部屋のさらにそのまた隣の、小鳥遊のお母さんの家に向かう。

まあ、遊のお母さん…とかそんなよそよそしい関係ではない。

小鳥遊 遊の母、小鳥遊 美空は僕らの育て親なのだ。

実の母、実の息子のような関係なのだから。

ドアを開けると、いいにおいが香る。

揚げ物の香ばしい匂い。

「太郎〜お皿あらつといて〜」

美空おばさんは揚げ物片手間で僕にニートたちの食器を洗えという。まあ いつものことだが。

「ほいほい。…あれおばさん。遊は???」
食卓のほうでいつも飯を待ち構えている遊の姿が見当たらない。

「部屋でシャワー浴びてるよ。太郎も一緒に入ってくればあゝ」
ニヤニヤと笑いながらこちらを見る。

「実の娘を僕に襲わせる気がよ…」

「何の話を…してるのよ…!」
湯上がりのブロンドの髪は何時にもまして妖艶だが…顔つきが怖い。

「いいじゃないの。小学生高学年まで一緒にお風呂に入ってた仲間じゃない」
爆弾発言してくれたババアは
まあババアというには若すぎる。

今年30歳の彼女は元グラビアアイドルだけあって、スタイルは抜群だ。

「はあああ!?! なっ…なにいつてんのよお母さん!?!」

「大体あれはあんたがっ!」

流石に僕も、遊も慌ててしまう。

まったくやめてほしい。年頃の若い男と女のまえでそういうことを話すのは。

「さあさあ。ご飯にしましょー」

茶髪でポニーテールなのが若く見せているのだろう。

実年齢より5歳は若くみえる。

部屋はかなり広く、三人じゃ空間的にも少し寂しい。

しかし賑やかな親子と一緒に食事を見ると、空間的な寂しさは全く感じられなかった。

「ごちそうさま」

ご飯も食べ終わり、先程からおばさんに言おうとしてたことを切り出す時がきた。

「なあ、おばさん。やっぱりあいつら学校に行かせたほうがいいんじゃないか!？」

こんなこと、普通なら『そうだね』で返すのが当たり前だろう。しかし、そうはならない。

「いいじゃない。学校に行きたいって言うてるわけじゃないんですよ?なら、無理に行かせることないわよ。」

おばさんの答はおかしい。

しかし、僕らを養ってくれているのは、小鳥遊家の母 美空だ。

以前は美空には旦那がいた。

外国人で良いところのお坊ちゃまだったらしい。

その旦那が子を孕ませるだけしておいて、金を残してどっかに消えてからは、美空が身を削ってお金を稼いで家族を養ってきた。

そんなおばさんが行かなくていい。といってしまつと、変に僕は口出しができなかった。

「小学生から引きこもりじゃ…この先大変だよ？お母さん」

遊もおかしいと思ってくれたみたいだ。だが

「小学生だつたらまだいいじゃない。第一、あの子達が学校に行つて嫌な思いをしたらどうするの??」

「な……なに勝手にあいつらを値踏みしてんだよ！あいつらは嫌な思いをしたくらいで心が折れるような弱い人間じゃない！」

馬鹿にされた気がした。そんなことから守らないとダメな弱い子だ。そういう風に聞こえた。

あんな引きこもりの妹や弟でも、やっぱり僕の妹なんだな、僕の弟なんだな。

あいつらを馬鹿にされてつい カツとなってしまった。

行間・『普通じゃない』事件

午後8時を回っていた。

深夜でも無いのに普原町は真っ暗だった。

商店街のむこう。

住宅街。ちようど太郎達のマンションがある地域のとある路地。

その路地をあるっている男がいた。

男は先週彼女とも別れ、職の安定しない生活を送っていた。

「こんな時は、ビールでもものまねえと…やってらんないよなあ。」

人気の無い路地だからといって、愚痴が漏れてしまっていた。

最近新しく始めたバイト先の先輩について愚痴。うざい面接官について愚痴。

大半は別れた彼女に対しての愚痴だった。

まだ酒も入っていないのに、もう酔っているようだ。

トボトボと歩くと、目の前に人影が見えた。

他人がいることを意識し姿勢を正した。

勿論お口にチャックもした。

酔いが醒めたようだった。

（やっべえ…聞かれたかな…恥ずかしッ…まあそんなにポリウムでかく無かったし？あの距離なら聞こえてないよな…？）

そんなことを考えながら男は再度、むこうからくる人影の大きさを確認した。

この路地は電灯と電灯の間隔が広く、余り前がよく見えない。だが、対向者との間隔が近づくにつれ、明瞭になってくる。

(…酔っ払いか…)
人影の正体は

フラフラと千鳥足で歩いてくるコートを着た中年くらい男だった。背は猫背っぽいのでたしかじゃないが、170は軽くある。

(酔っ払いなら…全然大丈夫だな…)

実はまだ愚痴が聞こえたんじゃないかと気になっていた男は、ここに来てやっと安心した。

『ピロロロロン』

メールだ。

ポケットの中にはいつていた。ケータイを取り出し内容を確認した。

《「くんばんわ」》

登録されていないアドレスからだった

(なんだこれ……???)

迷惑メールか間違いメールだろう。男は何かからかわれた気分になり、無愛想にケータイを閉じた。

「くんばんわ」

誰かが耳元で囁いた。

「……っひッ……!!」

その声の持ち主が、先程まで50mほど離れた先にいた、あの人影のものだと即座に理解した。

帽子を深く被り、白いスケキヨのようなマスクをつけた。コートの
大男の手には包丁があった。

「うわああッ！！助けッ！！誰かッだれかアア！！」

元々人気の少ない路地だ。助けは来るはずがない。

「さようなら」

その言葉とともに。

悲鳴は終わり、子供のような笑い声が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2675z/>

孤独症候群

2011年12月10日00時59分発行